

美化委員長

二次元ふち文庫

試し読み版

でも当人は悦んでいます

山本沙姫

表紙イラスト・恋河ミノル

よごしちやいました



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『美化委員長よごしちゃいました でも当人は悦んでいます』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



美化委員長 よごしちゃいました

でも当人は悦んでいます

山本沙姫

表紙 / 恋河ミノル

登場人物紹介

Characters

とばやしれみ

戸林麗美

湖谷田学園の美化委員長として、学園内の環境美化に信念を燃やす潔癖症の少女。また、幼い頃から年下の幼馴染み・哲郎の面倒を見ている世話焼きな性格。

しがきつろう

志垣哲郎

私立湖谷田学園に通う少年。身なりについてはズボラだが、柔道部に所属して部活に打ち込む、ひたむきな面も持つ。

「いつも言っているでしょう、家を出る前に寝癖はちゃんと直しなさいって……」
薄曇りの空の下。喧しいスズメの囀りに似た、可愛らしい声の小言が響く。

「ま、まだおかしいかな？ 直したつもり……なんだけど……」

闇夜のフクロウの囁きを髣髴ほうふつとさせる、物憂げにくぐもった声も。

埼玉の片田舎にある、閑静な住宅街。その一角に建つ、赤い屋根が目を引く二階建ての一軒家の前で、ボサボサ頭の少年が長い黒髪の少女に、乱れた茶色の髪を櫛でとかされていた。

「あー、あのお兄ちゃんまた怒られてるー」

「なりにく、あれ？」

「うわ、だっさーい」

脇を通り抜ける列をなした小学生や、こちらを見てクスクスと笑う女子中学生の視線を気にして、顔から火を噴きながら。

「全然直ってないわよ。耳の後ろとか頭のとっぺんとか、うなじの辺りとか……まったく、キミは昔からいつも手間をかけさせる……」

スツと鼻筋の通った大人びた顔の少女が、すっかりした口調でしゃべりながら頬の輪郭が柔らかな曲線を描く幼顔の少年の身支度を整える姿は、ものぐさな弟の面倒を見る厳しくも優しい姉のよう。

だが、二人は姉弟ではない。物心ついた時から、毎日顔を合わせているお隣さん同士。

(もう……一つしか違わないのに……いつまでたっても子供扱いするんだから……)

不満げに口を尖らせる少年は、目の前に立つ姉貴分の娘より頭二つほど低い150センチ少々の小柄な体躯。しかし広い肩幅や厚めの胸板など、身に纏った薄いグレーのブレザー越しにでも、幼顔には不釣り合いなほどガッシリとした筋肉質なのがわかるぐらい鍛えられていた。

彼の名は志垣哲郎^{しがきてつろう}。私立湖谷田学園^{こやだ}に通い、柔道部に所属する小さな武道家である。

「はい、おしまい。でも、髪が汗臭かったわね、ちよつと早起きしてシャワー浴びてサツパリしなさいよ。それからその靴、爪先に泥がついているわ。しっかり磨いておきなさい……」

寝癖直しが終わったあとも、世話焼きお姉さんの小言は留まることなく続く。櫛を制服の内ポケットにしまうと、今度は哲郎の身体のあちこちを指差し、まくし立てるように言い放つ。

(あーもう、またはじまっちゃったよ。しょうがないなあ……)

出がけにどれだけ身だしなみを整えていても、人目も憚らず色々ダメ出しをしてくるのは毎朝のこと。正直なところかなり恥ずかしいのではあるが、哲郎はいつも嫌がる素振りを見せず、ただ黙って聞いている。

何しろ彼女は大のきれい好き。いや、自分が汚れるのを嫌うのはもちろんのこと、身近な人まで清潔でないと気が済まない、超がつくほどの潔癖症なのだから細かい指摘をしてくるのも無理からぬこと。

「それから、ちゃんと毎日ワイシャツを替えているのは褒めてあげるけど、制服の胸ポケットの下にソースの染みがついているわよ。それにあと……」

赤みがかつた瞳をクリクリと動かして哲郎の姿を隈なく見つめ、細くしなやかな指を突き出して次々とダメ出しをしてくる黒髪の少女は、人のことをとやかく言うだけあつて実にきれいな身だしなみをしている。

80センチに満たないバストに、ほんの僅かに洋梨形に張り出した小さめのヒップという、細身で可憐な身体を包む制服はホコリ一つついていないばかりか、まるで毎朝アイロンをかけているかのように皺がない。

スラリと伸びた染み一つなくきれいな白い脚は、転んだら折れてしまうのではないかと思うほど華奢。膝下から細い足首にかけてのなだらかなラインは、清潔感のある黒いソックスでキュツときれいに引き締められている。

無論、履いている革靴もしつかり磨き込まれ、表面に艶やかな光沢を帯びていた。

「あと、前にも言ったけど柔道着は毎日洗濯してる？ 汗臭くなるわよ。そもそも、キミみたいな鈍そうなのが……」

いとこなんて、んっ、ないよ……」

火照った柔肌にくくつもの椿の花を咲かせながら、哲郎は肌もあらわな幼馴染みのお姉さんの全身を隈なく舐め回していく。

ちゆるっ、ちゅっちゅっちゅぷっ……。

胸元から腋の下、さらに縦割れの小さな臍を頂くなだらかなお腹をへて、下腹部へと進んだ。

「あ、そこは……ひんっ！」

ぶちゆるっ！

太腿の付け根に吸いつくと、か細い肉体に強烈な電撃が走り、ビクンと跳ね上がる。さらに続けて、哲郎はブルマーの端に太い指をかけた。

「えっ！ そんな……いきなり……」

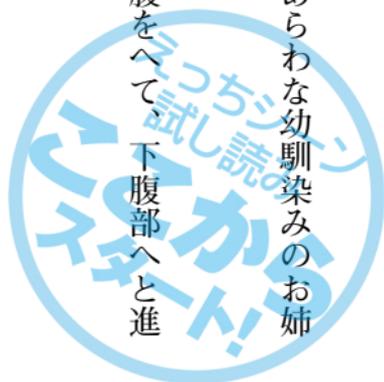
「だって……れみ姉の、すべてを見たいから……だめ？」

長い睫毛を震わせ、戸惑いの視線を送ってくる愛しいお姉さんを、真剣な目付きで見つめて哲郎は問いかける。

「……い、いいよ。哲郎。キミが、そこまで言うなら……」

「コクン」と小さく頷き、麗美は絞り出すような微かな声で答えた。

「……じゃあ、いくよ……」



氣絶するかと思うほど激しい胸の鼓動を抑えつつ、哲郎は太腿の付け根から指を滑り込ませ、ブルマーを下着共々脇へずらす。

シユルツ！

(あ……こ、これが、れみ姉の……)

微かに汗で湿った柔毛を纏った、乙女の丘がいざ目の前に晒されると、そのあまりの美しさと淫靡さに、思わず瞬きすることすら忘れて見入ってしまった。

「ここ……薄いんだね。中までよく見えるよ。まるで……そう、バラの花みたいだ……」
 荒い吐息にあわせてパクパクと微かに開閉する、縦一文字にクッキリと走る肉のクレヴアス。幾重にも重なった薄紅色の花弁の奥で、ひっそりとたたずむ小さな真珠が、まるで手招きでもしているかのように哲郎を引き寄せてくる。

「ばっ……ばかあつ！　へんなこと……言わないで……よ……」

今まで誰にも見せたことのない秘密の花園を凝視され、恥ずかしさのあまり叱りつけるものの、いつものような気丈さはほとんど感じられない。言葉の端々が、微妙に震えている。「だって、ホントにきれいで……きれいで……もう、見てるだけじゃ、我慢できないんだもの……」

興奮気味に生暖かい吐息をハアハアと吐きながら、哲郎は彼女の股間へ顔をグツと近寄せる。

「やっ、やだ……そんなに、息……かけないでえ！」

ぴちゅっ！

敏感な秘所に息を吐きかけられるあまりのくすぐったさに、思わず甲高い声を上げた瞬間、逞しい弟分のザラついた舌が、侵入を開始してくる。

みちゅっみちゅっみちよっ、ねちゅっ……。

粘り気のある水音を立てつつ、紅色の肉襷が舐め扱かれ、奥にたたずむ陰核に軽く歯が立てられる。

「はっ、はあああんっつつっ！ こんな、んっ……こんなとこまで、舐めるのお？ へっ、変だよ、こんなの……おしっこするとこだよお、きっ、汚いんだから……あんっ！」

敏感な部位を次々と責めたてられ、麗美はもはやパニック状態。釣り上げられた若鮎のように、スリムで艶やかな肉体をバタバタと震わせて喘ぐ。

「んくっ、で、でも……柔道部の先輩が言ってた、んくっ、すっ、好きな女の子と、んっ、本当に、大好きな……んっ、女の子とする時は……はぶんっ……身体中……大事なところも……舐めてあげるのが礼儀、だって……んっ……」

「やあんっ！ あそこが、ビリビリして、あっ、熱い……あひいんっ！」

艶めかしい吐息をつきながらしてきた彼女の質問に、聞きかじりの男女の営みの知識で答えるものの、彼女の耳には届いていないらしい。ただひたすら喘ぎ、徐々に柔肌を赤く

染めていく身体をのたうち回らせるばかり。

ぬびゅっ、ねぷっぬちゅっちゅるっ……。

震える舌先が充血した肉真珠を転がし、肉褻を一枚一枚数えるように舐めるたびに、下腹部がじんわりと熱くなり、全身が痺れていく。

「……うんっ、あつ、あんっ……そこ……いい、もつと……」

時がたつにつれて、麗美は両足をマットに踏ん張り、自ら腰を浮かせて哲郎の寵愛を求めはじめようになってきた。その頃にはもう、秘園の奥底からは愛蜜が間欠泉の如く湧き出し、大きな足元に水たまりを作り出している。カビ臭い物置小屋の中を、甘酸っぱい乙女の香りで満たすほどに。

「れ、れみ姉……僕、もう……我慢できない……」

上擦った声で呼びかけながら、限界が近づいてきた哲郎はおもむろにブリーフを脱ぎ捨てる。

「あ……」

小柄な体軀には不釣り合いな、太く長い一物が幾本もの青筋を立てて臍の上まで反り返り、愛しい人の中へと入りたくてウズウズしている姿を曝け出した。

（哲郎の、オチン、チン……こんなにすごいなんて……）

幼い頃には、お互いの家にお泊りして一緒に風呂へ入ったことも何度もあった二人。そ

で、夜間部の野球部が練習をしていた。

「……うーん、これじゃしばらくは、ここから出られないなあ……」

迂闊に外へ出て、粘液まみれの姿を彼らに見つかつたら只事ではない。ヘタに騒がれて教師にまで知られたら、それこそ停学ぐらいでは済まないかも。

「そうよね、練習が終わるまでは、ここから出られないわよねえ」

困り顔の哲郎とは対照的に、麗美は妙に嬉しそう。腕組みして考え込む彼の背後に、いきなり抱きついてくる。

ぱふっ！

「れ、れみ姉？」

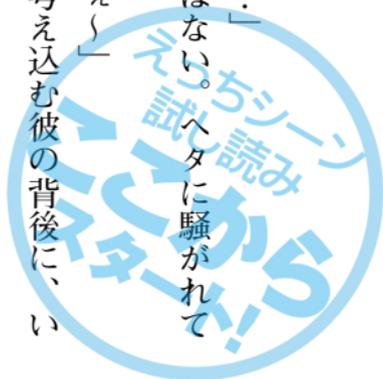
ブラをたくし上げたままの、剥き出しになつた小さな乳首が二つ、背中にポチポチと押し当てられているのがわかつた。

「だから、それまでもう一度、しましょ。今度は、わたしにリードさせてほしいな……」

耳元を、生暖かい桃色の吐息と艶めかしい声が撫でまわす。無論、大好きなれみ姉と再び結ばれることに、拒否する理由などあるはずがない。

「何があつても守る」と、かつこいいことを言つた手前、主導権をとられるのは少し気恥ずかしいが。

「い、いいよ。れみ姉が、望むなら……」



「決まりね。じゃあ、今度は哲郎が横になつて」

「こ、こう？」

戸惑いながらも、愛しい世話焼きお姉さんに言われるがままマットに横たわると、彼女は股の間に滑り込み、寝起きで萎れた男根をしげしげと見つめてくる。

「ねえ哲郎……男の人も、ここ……舐められたりすると気持ちいいのかしら？」

「え!? ええええ……ど、どうしたの急に……」

突拍子もない質問をぶつけられて、哲郎は目が飛び出るかと思うほど驚く。そうしたプレイがあるということは、柔道部のエッチな先輩たちからの入れ知恵で知ってはいるものの、どう答えればいいのか対応に困る。

「いや、さつき……キミに舐められた時にすごく気持ちよかったから……わたしも、あんな風に気持ちよくさせられるかな、と思って……」

どうやら、目の前で己が一物を愛おしく見つめてくる世話焼きお姉さんは、特にフェラチオの知識があるわけではなく興味本位で尋ねてきているらしい。

「い、いやそれは……うっ！」

ぴちゅっ！

恥ずかしげにたどたどしい口調で聞いてきた麗美は、薄桜色の艶やかな唇を開き、湿り気を帯びた細い舌で亀頭の割れ目を舐めてきた。尿道から股間へ向けて、一気に痺れが走る。

「くすつ、へんな味……わたしもこうなのかな？」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら、彼女はさらに口での愛撫を続けてきた。
かぶちゆるつ！

艶やかな唇を開き、最初の一舐めの刺激で再び勃起しはじめた一物の先端を咥え込む。

「んくつ、んっんっんっんっ……」

そしてエラの下を軽く締めつけ、細くしなやかな舌が、裏筋に沿って上下にペタペタと舐め回してきた。

「だ、だめだよ。そんな汚い……んっ！」

「哲郎だつて、んっ、んくつ、わたしのは……はうんっ、あそこ……んっ、舐めたじゃない。だから、平気よ……」

潔癖症のお姉さんに、不浄のモノを咥えさせる後ろめたさから、哲郎はなんとかやめさせようと説得するものの、彼女は意に介さない。

「んぐんっ、んっんっんっんっ……どっ、どう……こんなのは……」

じゆるつ、じゅぶじゅぶじゅぶ……。

長い黒髪を振り乱し、小さな頭を上下に素早く振る彼女は、エラ下から根本近くまで深く呑み込み、唇でしごき、思いつくままに刺激を加えて射精を促してくる。

（す、すごい……れみ姉、はじめてなのに、こんなに僕のを……）

次々と襲い来る快樂の波に、多感な少年の一物は爆発寸前。だが、さすがに愛する人生臭い精液を飲ませてしまうのは躊躇われる。

「だっ、ダメだ……離れて！」

咄嗟に彼女の華奢なで肩を掴んで引き離す。

「あえっ!? なっ、何? きゃっ！」

どびゆるっ! どぷっどぷっどぷっ……。

だが、不覚にも口の中からペニス引き抜かれた時の一擦りが決定打となり、再び快感の限界を超えた肉の巨砲が、愛欲の散弾を撃ち出した。天井に届きそうな勢いで噴き出したスペルマが、火照って朱に染まったきれいな好き少女の顔を白く染めていく。

「あうっ……ご、ごめん……れみ姉の顔……汚しちゃって……」

物置小屋へ連れ込んだ時のように、慌てて半身を起こした哲郎はパチンと手を合わせて拝み倒すように詫げる。

「……まったく、キミって子は人の顔にいつぱい出しておいて、まだまだそんなに元気なの? では……」

先割れからスペルマを滴らせつつ、ピクピクと痙攣する赤黒い一物を愛しげに見つめて微笑むと、麗美はスツと立ち上がる。そしてしなやかな指先を腰へ伸ばし、グツシヨリと湿ったブルマーを下着とともにスルリと脱ぎ捨てた。

「あ……」

窓ガラス越しに差し込む柔らかな光を浴びて、キラキラと艶めかしく輝く粘液まみれの恥毛に覆われた乙女の丘の美しさに、思わず哲郎は息を飲む。

「わたしを気持ちよくしてくれなきゃ許さないわよ、哲郎」

軽くウインクをして微笑みかけると、麗美は引き締まった下腹部を跨ぎ、両膝を外に向け、ひし形に屈伸してゆっくり腰を下ろしていく。

ちゅぷっ！

熱く燃え滾る亀頭が、小さな水音を立てて蟻の門渡りの辺りに触れた。

「あ、ちよつと、ずれちゃった……」

自らリードすると言っておきながら、愛しい人の一物をうまく受け入れられなかったのが恥ずかしいらしく、気まずそうに指先で目元を掻きながら麗美は腰をずらして微調整をはじめめる。

ぬるっ、ぬぷっ……。

「んっ、あ、あれ……」

ところが、粘液を纏った亀頭が滑り、秘肉のクレヴァスをなかなか捕らえられない。火照った肉槍の先端に粘液まみれの柔肌が貼りつき、グニグニとこね回される刺激だけで、もう一度爆発してしまいそう。

(これも、気持ちいいけど……僕も、もう一度、れみ姉と繋がりたい。だから、耐えな
 きや……)

肉棒の付け根に力を込めて、ひたすら射精を封じようとするものの、いつまで持つか自
 信がない。

ぬぷりゅつ、ねぷつねぷつつるりゅつ……。

「あんつ、どつ、どうして……哲郎の、オチン、チン……入れたいの……」

腰を振るたびに甘酸っぱい香りを漂わせた恥蜜を滴らせながら、パクパクと開閉を繰り返す肉の花弁が、純情少年の視線を誘う。

(れみ姉のあそこ……また、あんなに開いて……)

薄い恥毛を纏ったクレヴァスが、粘液を垂らす姿がなんとも艶めかしい。見ているだけで、自然とそそり立つペニスがますます固くなっていく。

「くっ、んっ、えいっ!」

ぐりりりっ! ずぼっ!

苦し紛れに両足を踏ん張り、下腹部に思いつきり力を込めて腰を下ろすと、麗美はついに想い人の逞しいモノを受け入れることができた。ただし、彼女の望みとは違う肉穴に。

「やつ、やだあつ! お尻に、こつ、こんなところに、入っちゃったあつ! 前に欲しいの
 にい」

思わぬ場所に突き刺さった肉槍を抜こうと、彼女は華奢な肉体を振り、小さなヒップを揺らす。しかし身体が強張り、括約筋が縮んで逆にますます想い人のペニスを強く締めつけてしまう。

ずりゆっ！　じゅぶっ、じゅぶっじゅぶっ……。

「あうっ、れ……れみ姉。お尻の、中も……すぐく、んっ、気持ちいい……」

一方で哲郎は、膣口内に入れた時よりもはるかに強い締めつけと、腸壁の肉襞に張り詰めた表皮を擦られる心地よさを敏感な一物に感じていた。

膣内の感触を柔らかな肉襞で優しく撫でられるような感覚とするならば、直腸の締めつけは、まるで情熱的に抱きしめられているかのよう。より強く、より長く、この快感を味わいたい思いに駆られて、小さなヒップを驚掴みにして引き寄せると、自らも尻がマットから浮くほど腰を跳ね上げ、直腸内を突き込み回す。

ぐぶるりゆっ、ぐりぐりぐりぐり……。

「わた、わたしもっ、んっ、あうんっ！　哲郎のおっきいので、くうんっ！　お尻の穴……グリグリされるの、よくなつて、あん、気持ちよくなつてきちやっただあ。どうにかなっちやいそうっ！　あんっ！」

ジットリと汗の浮いた喉を反らし、麗美は力の限り叫ぶ。望まぬ形で経験してしまったアナル結合ではあったが、未熟ながらも徐々にその新たな刺激の心地よさに目覚めはじめ

ていった。

だが、それだけでは物足りない。

「で、でも……て、哲郎……こっち、こっちが切ないの……お願い……わた、わたしの……おつ、おま……んこ、ぐちゅぐちゅにしてえっ！」

左右の人差し指と中指で肉割れの端を押さえ、不完全燃焼気味に疼く陰唇を左右に大きく割り開く。

「こっ、これで……いいの？」

下腹部の上で跳ねながらおねだりしてくる麗美に応え、哲郎は粘蜜を滴らせる乙女の秘園へ震える指先を伸ばす。そして、固く充血した肉粒を揃えた左右の人差し指で軽く挟み込んだ。

ぷちよっ！

「はひいんっ！ そっ、そこ……いいっ！ もっと、もっとこねこねにくくに、くりくりしてえっ！」

はしたない悲鳴を上げつつ、汗まみれの華奢な身体を大きくくねらせ、限界まで快感を貪ろうとする麗美。彼女に引きずられる哲郎も、皮下神経に続々と刻み込まれる刺激に、脈打つ一物が破裂しそうなほど膨らんでいく。

「あんっ！ まっ、また……哲郎の、オチン……チン……んっ、おつきく、堅くなってる

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>